

氏名	マツ 松	オカ 岡	アユム 歩	
学位の種類	博士（美術）			
学位記番号	博美第285号			
学位授与年月日	平成22年3月25日			
学位論文等題目	〈作品〉蕭蕭 〈論文〉現代の絵巻 その可能性と展開			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	手塚雄二
（論文第1副査）	〃	〃	（ 〃 ）	田口榮一
（作品第1副査）	〃	〃	（ 〃 ）	たほりつこ
（副査）	琉球大学	講師		上村豊

（論文内容の要旨）

## 第一章 世界における絵巻と「日本画」としての絵巻

筆者が、絵巻の復活を、博士課程における研究テーマに選んだ理由は大学院に進学してから取り組んでいる古典模写の経験によるところが大きい。具体的には「国宝源氏物語絵巻」の模写を制作することを主とした、古典描法の研究である。

「国宝源氏物語絵巻」とは、言うまでもなく紫式部の「源氏物語」を題材としたもので、徳川本は元三巻、五島本は元一卷の巻物であったが、いまはどちらも詞と絵を離し、すべて額面に仕立てられて保存されている。

筆者は、絵巻の最大の魅力は天地に比べ横が極端に長いプロポーションにあると考えていた。その点で言えば「国宝源氏物語絵巻」は絵巻物特有の魅力をすでに失っていて、「日本画」として存在していることになる。しかし、だからこそ元の姿を思い想像力を膨らませることになり、それにより現代の日本画の世界では触れる機会が少なかった絵巻物の世界に深く足を踏み入れ、その世界に魅了されたのである。

## 第二章 何故絹による制作を選択したのか

支持体としての厚手の和紙と絹の差異

私の日本画制作は、基本的には絵の具を塗り重ね、重厚な絵肌を作り上げることを特徴としている。この厚塗りの技法は、現在の日本画用に製作されている雲肌麻紙を代表とした厚手の和紙に依存する技法であり、過去の絵巻制作に用いられていた技法とは大きく異なる。

しかしながら、絵巻の形式とは、まさに巻物状に絵そのものを巻くものである。その結果画面にかかる圧力や、支持体の伸縮、それによる絵の具への負荷などの様々な要素が考慮され、薄塗りで制作することが前提条件とならざるをえない。

そこで私が着目したのは、支持体を和紙ではなく絹にすることである。絵絹（絵を描く絹）は柔軟さと強度を併せ持ち、折れにくく癖も付きにくいいため、絵画を「巻く」には優れた支持体なのである。

絹独自の表現の魅力

絵巻の殆どは、紙本に彩色されたもので、料紙を何枚も貼りつないで横長の画面を形成しているのだ

が、例外的に絹本に描かれた絵巻もいくつか存在する。

#### 国宝 一遍上人絵伝（巻第七 東京国立博物館蔵）調査

この絵巻は、絹を基底材とする絵巻として希少であるとともに、絹本独自の水墨画法、顔料がもたらす独自の表現効果や特異性、意義を考察するためにはこの上ない作品である。とりわけ実見により、特に絹による絵巻の経年変化の魅力を考察することが出来た。

#### 本制作へ向けての実験

これまでの考慮の結果、現代日本画における絵巻物を完成させるには「絹に描かれた現代日本画をトラブル無く巻物に仕立てあげる為の研究」が必要である。

この研究内容は以下の4つの項目から構成される。

##### 1 基底材の選別

絹には種類が色々あり、自らの技法による絵巻を完成させる上で一番相性の良い基底材を選別する。

##### 2 絵の具の粒子の強度

日本画の顔料は、それぞれの粒子の大きさが10段階程度に分かれているが、絵具を厚く塗り巻いた時に、番数によりどのような違いやトラブルが起こるのかを実験サンプルにより明らかにする。

##### 3 膠の種類

厚塗りの絵の具を巻くという特殊な手法であるために、その用途に合った膠を、実験サンプルを用いて探る。

##### 4 作品の制作

実験結果（1～3）を踏まえ、実際に作品制作をする。ここでは「巻く絵画」として掛軸「夏行く」、  
「蝌蚪(かと)」の二作品を制作。

### 第三章 修了制作による実践と解説 現代の展覧会に適応する絵巻の新しい形

#### 観賞方法の変化が及ぼす絵巻の絵画化

絵巻物の魅力を自らの日本画制作に取り入れる方法論として、実際の絵巻制作をするだけでなく、絵巻を開閉して楽しむ個人観賞用にとどまらない、新たな形式の作品を制作する必要がある。第三章までにその解決法として考察・実践してきた現代の日本画技法による絵巻物制作を、広い空間の展示にも対応できる形式に発展させ、その魅力を新しいかたちで提示する。

#### 修了制作による実践と解説

本章では、第三章までに実践してきた従来の「個人観賞に適した絵巻物」と、第四章で論じた「展覧会場展示に適した絵巻形式の日本画」を実践する。それにより本論文の結論を導き出した。

##### 作品1 「夜想曲」

第三章で実践した、現代の日本画技法による絵巻を完成させる実験を元に選び出した素材で、個人観賞用に適した絵巻物を制作したものである。この作品は絵巻物特有の、「空間の移動」を意識した作品である。

##### 作品2 「蕭蕭」

現代の展覧会形式に適応した絵巻形式の日本画を実践したものである。縦60cm、横1320cmの大作であり、個人観賞用の絵巻物として楽しむ作品ではなく、会場に展示して画面全体を歩きながら鑑賞していく形式である。この作品は絵巻物特有の「時の移ろい」を意識した作品である。

## 結 論

開閉しながら鑑賞する絵巻物と、展覧会形式に適応した、見る側が歩を進めながら鑑賞する、絵巻形式の日本画では、その観賞方法や形態は大きく異なる。しかし、絵巻の最大の魅力とは、その形式によるものではなく、鑑賞者側の眼前にある「現在」の連鎖が展開されていくことであると、制作を通して確信した。場面相互の関係を確認することはなく、現在の連鎖が本当の絵巻特有の要素だと発見することができた本論文だが、これからの展開としては通常の間角い形式のなかにも、日本人が成熟させた絵巻特有の時間表現を取り入れていくことが、これからの私の日本画制作にとって最も重要な課題なのである。

### (博士論文審査結果の要旨)

「日本画」のアイデンティティーを問いつつ制作を続けてきた申請者は、《国宝源氏物語絵巻》の模写を契機として、「絵巻」とりわけ説話物語絵巻の「異時同図」や自在な「霞」の利用などの時間・空間表現法の導入と絵巻制作の実践が新たな日本画への切り口となり得ると確信した。まず《国宝一遍上人絵伝》の実見・調査結果等に基づき、独自の表現力を持つ絹を支持体に選び、これまでの厚塗りの日本画制作と同様の膠（三千本膠）や顔料を用いたサンプルや掛け軸を試作して巻いては戻し、表面の摩耗や折れなどのトラブルの発生を観察記録する実験を重ね、その結果を参考にして新たに軟靱膠素と太い軸による作品「夜想曲」を制作した。永遠を象徴する月が巻頭に描かれ、鑑賞者は月光に照らされた蝶に導かれて空から霞を隔て彫刻群の置かれた人間の文明を象徴する陸、さらに同様にマンボウの泳ぐ海中へと誘われるという空間の移動を意識した連続式絵巻であったが、絵巻に仕立てる裏打ちの工程で予想外の亀裂が生じ厚塗りの技法による絵巻制作の困難に直面する結果となった。

作品「瀟瀟」は、その反省と、現代における絵巻の公開が、本来の手元で巻広げて鑑賞する方式と異なり、長大な画面として展示される実態に即して、横長いパネル仕立てとし、蓮や睡蓮が芽吹き満開を迎えやがては枯れてゆく四季の時間の推移と、立ちこめる夜霧で人間が一生持ち続ける懐疑や煩悩を擬態化したダブルイメージを鑑賞者が順次移動しながら眺めるというもので、鑑賞者の眼前の場面の「現在」の連鎖が過去の記憶を作っていく従来の日本画では表現できない展開を可能にしたと述べる。

論文はこうした思考と実験・制作の過程を記述し、真摯な創作への意欲を十分に裏付ける内容である。審査委員会では、論旨の一貫性などやや問題はあっても、果敢な挑戦と困難を克服してゆく柔軟な対応が認められるとして高い評価を得た。

### (作品審査結果の要旨)

申請者の作品は横長の画面に表現されている。こうした横長の画面は、現代の日本画家が好んで描く長さの作品ではなく特殊な形状である。一目で全画面、全体感を捉えるのではなく、巻物となって繋がった場面を少しずつ、ずらしながら鑑賞する。こうした「巻物」を申請者自身がどう捉えどのように展開できるかという事に挑戦したのが申請者の作品である。6尺の幅で場面展開していく構成でいくと、絵巻物は本来具体的な物語の展開が人物を中心に繰り広げられていくが、申請者の作品「夜想曲」は、蝶が何度も現れあかも自分自身の行く末を案じ、擬人化による表現法を用いている。作品「瀟瀟」では蓮沼を物語の時間軸の中の異時同図法とも、また幻想的空間ともつかない現われで表現している。春夏秋冬になぞらえながら、作者の考える沼の一年間を人生に例えた。この二つの作品に共通して言えることは場面をつなぐ曖昧な部分は霞を使い暈しながら展開して行くことで、これは古典の持っている伝統的絵巻の手法を踏襲している。霞とは、霧や靄、煙霧などで遠くの景色がぼやけている様であり文学的な表現手法ともいえる。こうした表現に作品の情感や精神性の深さが読み取れる。しかし申請者の二つ

の作品に共通して言えることは、主役の描き方、描写は情感があってもリアリティーが希薄であり、そこに全体的な作品の弱さを感じてしまう点であるが、申請者がもう一度自身の作品を見直し、また作り上げ、モチーフから得られる表情の深さや、更なる情感や精神を画面から感じられる作品に仕上げることで、今後大いに期待が持てる作家になると言える。

また、今回、申請者は実験的であるが、絹本の厚塗りにも挑戦している。結果的に完璧とは言えないものであったが今後引き続きその研究は継続して貫きたい。こうした試行錯誤の取り組みは作家として評価するものであり、将来に繋がる経験や制作態度を学んだと思える。

以上の理由により、申請者の将来の希望を込め、2010年1月14日、主査、副査である日本画研究室教員の3名、及び論文担当第一副査、田口榮一教授と共に審査委員会を行い博士学位授与に値すると判断し合格とした。

#### (総合審査結果の要旨)

松岡君は、日本画における絵画の意義と自分の絵画制作についての論文を発表した。時の流れを表し物語風に表現した絵巻絵画は、日本の独特のものであり文化であると言う。修士課程で、源氏物語絵巻の模写を行い研究していく事によって「大和絵」すなわち日本画の原点に立ち返り、絵画制作に取り組みきっかけとなった。現代絵画と絵巻の最大の違いは「時間の流れ」にある。その時間の流れを取り込む事によって、彼は絵画を成り立たせようと試みた。

彼は学部・修士を通じて叙情性豊かで雰囲気のある夢のある世界を描いてきた。この頃から一つの画面に淡い時の流れを組み込もうとしていた様に思う。修士課程で源氏物語絵巻に魅了され日本画の源流を見た時、時間の流れを一つの画面に取り入れ、四季の移ろいを描き、物語として表現する事が日本文化としての新たな絵画制作であるとし、意欲を掻き立てられた。そして、絵巻を研究し制作する事によって、四角い画面でも時の流れを表現出来るという制作上の基盤を得た。彼の論文によると、博士初期の作品「星の音」・「青い糸」等は、一瞬の時間を切り取った西洋的絵画と言っている。が、すでに一つの画面に異次元・異空間を組み入れ物語的な作風になっていた様に思われる。初めから持っていた彼の創作性が、絵巻によってより確かなものへと裏付けられたにすぎないのかもしれない。

そもそも絵巻は、現代でいう紙芝居・絵本と同じで、一連の画面を見進んで行く事により全体像が浮かび上がり、叙情的な物語として完結する。作画的には、表面的な辻褄合わせにより画面を構成しているのである。現代の絵画は、それら様々な思いをバランスよく構成し、一瞬の感覚に訴えかける事により絵画性を生み出している。松岡君は、絵巻の心を文章で表現する事で、より明確に四角い画面での表現制作を行えるようになった。内容的には、学部の頃からの制作の流れに絵巻の心を取り込まれた形である。そして、技法としては、膠やマチエールの実験を行い、現代の絵巻制作にも挑戦し、作品「夜想曲」・「蕭蕭」のように今まで培ってきた彼の表現方法を変える事なく、巻物に応用し成果を上げた。ただ、作業に偏りすぎたせいか、修士までの作品に比べやや表面的な綺麗さを追いすぎるあまり、甘く俗的な制作になってきた感がある。しかしながら、院展に連続して入選する等、評価も得ている。この先、厳しい姿勢で制作に挑み日本画の根本を研究し見直すことが、叙情的で物語風ではあるが既存の具象画に新たな世界を生み出してくれるのではないかと信じている。

これまでの研究と制作に対し、審査員全員の意見の一致により合格とした。